

# 令和2年度病虫害発生予察情報 予報第2号（5月）

令和2年5月29日  
発表：福島県病虫害防除所

## 1 普通作物

作物名	病虫害名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
水 稲	いもち病 (葉いもち)	全 域	平年並	平年並	①田植時期は、平年並と予想される。 ②天候予報（5月21日発表1か月予報）によると、降水量は平年並と予想されている(±)。	①補植用置苗は本病の伝染源となるため、速やかに処分する。 ②窒素肥料の多用を避ける。
	イネドロオ イムシ	中通り 会津 浜通り	平年並	平年並 やや少ない	①有効積算温度による越冬成虫の水田侵入盛期は、平年並と予想される。 ②天候予報によると、気温は高いと予想されている(－)。 ③近年、中通りで発生程度の高いほ場が散見される(+)。	①発生が目立つ場合は薬剤防除を行う(要防除水準:加害盛期に3～4齢幼虫が10頭/株以上寄生)。 ②発生時期が早く移植が遅れた場合は、被害が大きくなる傾向があるので注意する。
	イネヒメハ モグリバエ	全 域	－	やや少ない	天候予報によると、気温は高いと予想されている(－)。	深水管理や直播栽培では被害が発生しやすいので注意する。
	イネミズゾ ウムシ	中通り 会 津 浜通り	－	やや少ない  平年並	5月中旬の調査では、発生ほ場割合は平年より低かった(－)。	成虫の寄生が、100株当たり40頭以上確認される場合や、水田内のほぼ全葉に食害が確認される場合は茎葉散布剤を散布する。
	イナゴ類	全 域	－	平年並	近年、発生ほ場割合は平年並であるが、中通りで発生程度の高いほ場が散見される(±)。	例年発生が多いほ場では、6月中旬～7月上旬にふ化幼虫を対象に薬剤散布を行う。
麦 類	<b>赤かび病</b>	中通り 会 津  浜通り	やや早い  平年並	平年並  やや多い	①出穂期は、中通り、会津で平年よりやや早かったが、浜通りでは平年並であった。 ②出穂期以降の感染好適条件の出現は浜通りで多かった(+)	<b>発病した場合は刈り分けを行うなど、被害粒の混入を防ぐ。また、収穫後はすみやかに乾燥・調製を行う。</b>
	うどんこ病	全 域	－	平年並	①5月中旬の調査では、平年並に各地方とも発生は確認されなかった(±)。 ②天候予報によると、降水量は平年並と予想されている(±)。	薬剤防除にあたっては収穫前日数に注意する。

注) 予報の根拠の中で (+) は多発要因、(－) は少発要因、(±) は平年並要因であることを示す。

2 果樹

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
リンゴ	斑点落葉病	全域	—	平年並	新梢葉での発生は平年並(平年同様)に確認されなかった(±)。	
	腐らん病	全域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった(±)。	枝腐らんは見つけしだい健全部5cm以上含めて切り取る。 胴腐らんは見つけしだい周囲の健全部まで5cm広く削り取り、トップジンMペーストの原液を塗布する。
	キンモンホソガ	全域	—	平年並	中通りの一部ほ場で発生が確認されたが、発生程度は低く、会津では平年同様発生は確認されなかった(±)。	
モモ	灰星病	中通り	—	平年並	花腐れの発生は平年並(平年同様)に確認されなかった(±)。	本病による枝枯れは見つけしだいせん除し、適切に処分する。
	せん孔細菌病	中通り	—	多い	①春型枝病斑の発生ほ場割合は平年より高かった(+) ②新梢葉での発生ほ場割合は平年よりかなり高く、発病葉率の高いほ場も見られた(+)	①罹病部(枝・葉・果実)のせん除を徹底する。 ②薬剤散布は降雨前に実施する。 ③晩生種や黄肉種などで本病の発生が多い場合は、仕上げ摘果後、直ちに袋かけを実施する。 (注意報第2号参照)
	モモハモグリガ(第1世代成虫)	中通り	—	やや多い	被害ほ場割合は平年よりやや高かった(+)	第2世代幼虫発生初期に防除を実施し、次世代の密度低下を図る。例年発生が見られない園地でも遅れずに防除を行う。
ナシ	黒星病	全域	—	やや多い	①果そう基部での発生ほ場割合は平年より高かった(+) ②新梢葉での発生は平年並(平年同様)に確認されなかった(±)。	果そう基部病斑や発病葉・果実は、徹底して除去し、適切に処分する。 (注意報第3号参照)

果樹共通 (中通り :リンゴ、 モモ、ナシ 会津:リンゴ 浜通り: ナシ)	アブラムシ類	全 域	—	平年並	①リンゴでの寄生ほ場割合は平年よりやや高かったが、発生程度は低かった(±)。 ②モモ、ナシでの寄生ほ場割合は平年並であった(±)	
	カメムシ類	全 域	—	平年並	①調査ほ場への飛来や果実被害(モモ)は平年同様確認されなかった(±)。 ②指標植物(サクラ)への飛来数は平年並であった(±)。	越冬世代成虫による加害は幼果期から始まるため、特に山沿いの園地ではよく観察し、飛来を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
	ハダニ類	中通り 会 津 浜通り	—	平年並  やや多い	①中通り、会津での寄生ほ場割合は平年並であった(±)。 ②浜通りでの寄生ほ場割合は平年より高かった(+) ③天候予報によると、気温は高いと予想されている(+)	<b>要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達した場合は、殺ダニ剤を散布する。</b>

注) 予報の根拠の中で(+)は多発要因、(-)は少発要因、(±)は平年並要因であることを示す。

### 3 野菜・花き

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
夏秋トマト(被覆栽培)	灰色かび病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	多湿条件で発生が多くなるので換気を十分に行う。
	アブラムシ類	全 域	—	やや少ない	発生ほ場割合は平年よりやや低かった(-)。	①ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。 ②施設開口部をネット被覆していない場合、有翅虫の飛込について注意する。
	コナジラミ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
キク(露地栽培)	白さび病	全 域	—	平年並	育苗床からの持ち込みによると考えられる発生が見られたが、発生ほ場割合は平年並であった(±)。	①多湿条件が続くと発病しやすくなるので、予防散布に努める。 ②品種により発病に差があるので、発病しやすい品種では防除を徹底する。
	アブラムシ類	全 域	—	やや少ない	発生ほ場割合は平年よりやや低かった(-)。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。

キク（露地栽培）	ハダニ類	全 域	—	やや多い	①発生ほ場割合は、平年並であった（±）。 ②天候予報によると、気温は高く、晴れの日が多いと予想されている（+）。	①低密度時から防除を実施する。 ②抵抗性の発達が懸念されるため、防除薬剤の選択に注意する。
	アザミウマ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、低密度時から防除を徹底する。
	ハモグリバエ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	上位葉での発生に注意し、低密度時から防除を実施する。
リンドウ ※過去5年間の平均値と比較	葉枯病	全 域	—	例年並	①発生ほ場割合は、例年よりやや高かった（+）。 ②天候予報によると、気温は高く、晴れの日が多いと予想されている（-）。	多湿条件で発生が多くなるので、予防散布に努める。
	ハダニ類	全 域	—	例年並	①発生ほ場割合は、例年よりやや低かった（-）。 ②天候予報によると、気温は高く、晴れの日が多いと予想されている（+）。	ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。
	リンドウホソハマキ	全 域	—	例年並	発生ほ場割合は、例年並であった（±）。	高温の影響により被害拡大が例年より早まる可能性がある。ほ場をよく観察し、発生が多い場合は速やかに防除を実施する。

注) 予報の根拠の中で（+）は多発要因、（-）は少発要因、（±）は平年並要因であることを示す。

○注意が必要な病害虫

夏秋トマト（被覆栽培）	<p><b>■トマトかいよう病</b></p> <p>昨年度発生が多くみられています。本病は細菌病であり、種子や土壌中の病原菌が第一次伝染源となり、その後、芽かきや収穫、誘引などの管理作業による二次伝染により被害拡大します。作業手袋やハサミ等をこまめに消毒し、被害拡大を防ぐようにしてください。万が一ほ場で発生した場合は、速やかに抜き取り、ほ場外に持ち出し適切に処分してください。</p>
-------------	--